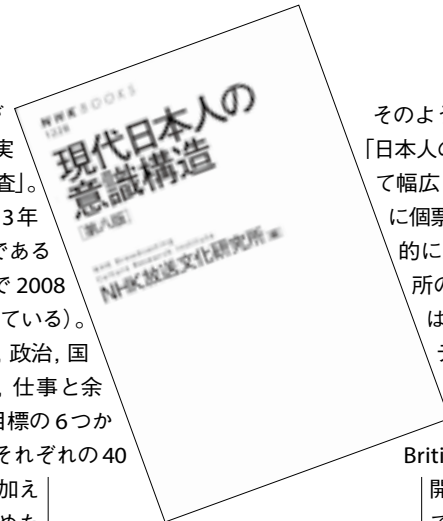


NHK放送文化研究所が1973年より5年おきに実施している「日本人の意識調査」。本書はその最新の第9回2013年調査を用いて編まれた一冊である（これまでも同名のタイトルで2008年までの調査結果が刊行されている）。本書は、男女と家庭のあり方、政治、国際化・ナショナリズム・宗教、仕事と余暇、日常生活、生き方・生活目標の6つからなる幅広い領域を対象に、それぞれの40年間の軌跡を分析している。加えて、調査の背景や概要をまとめた序章と全体総括を行う終章、質問文・単純集計・解析方法や日本社会の変化に関する付録まで収録した一冊である。

本書で示される様々な結果はそれぞれ興味深い。例えば「日本は一流国だ」という項目について、2008年に「そう思う」人は39%だったが、2013年では54%と15ポイントも上昇していた。この結果は、ちょうど2013年調査の一月ほど前に開催が決定した2020年東京オリンピックの影響と推論される。とはいえ2009年に日本の名目GDPが中国に抜かれ世界3位となり、2013年には中国の半分程度になった事実から考えれば、意外ともいえる。このような一つ一つの結果が、一般的な日本人の抱く様々な意識の変化と現状について考えるための貴重な資料となりうるものである。

また本書が用いる「日本人の意識調査」のような繰り返し横断調査は、加齢(Age)・時代(Period)・世代(Cohort)という3つの要因(以下APCと略記)を識別する分析が可能な貴重なデータとなる。本書でも、調査ごとの年齢層別グラフと出生年別グラフを用いてAPCを分離する分析を行い、例えば結婚観は世代によって決まっていれば加齢の影響を受けないなど興味深い知見を示している。



現代日本人の意識構造

(第八版)

NHK放送文化研究所 編

NHK出版
2015年
B6判, 296ページ
1,512円

そのような繰り返し横断調査の中でも、「日本人の意識調査」ほど長期間にわたって幅広い社会意識を定点観測し、さらに個票が公開されている調査は、世界的に見ても数少ない(統計数理研究所の「日本人の国民性」調査の開始は1953年と非常に早い、個票データは非公開)。例えばアメリカのGeneral Social Surveyも同時期の1972年開始、英国のBritish Social Attitudes Surveyでも

開始年は10年ほど遅い1983年である。あるいは意識に関する国際比較調査の中でも歴史の長い世界価値観調査ですら1981年からである。そのように長期の調査継続が可能となった一因として、調査ごとにその成果を報告し、世に問い続ける本シリーズの存在は決して無視できない貢献であろう。

ただし本書は、調査全体を幅広く扱った分だけ、基本的にはグラフを用いた簡単な分析に止まっている。そのため、例えばAPC以外の要因の影響などは、より詳細な分析が必要である。あるいは

本書が論じる意識の変化が、日本独自ものか、それとも世界的な潮流なのかなども、類似項目を調査する他国の繰り返し横断データとの比較によって明らかにされることが期待される。

ちなみに第1~8回までのデータはすでにデータアーカイブ(SSJDA)より公開されており、二次分析研究も行われている(太郎丸博編, 2016, 『後期近代と価値意識の変容—日本人の意識1973-2008』東京大学出版会など)。今後、本調査が続くだけでなく、新たなデータが公開され続ければ、二次分析も含めて様々な興味深い知見が得られることは必至であろう。そのような研究の端緒としても本書は必読の書であり、幅広く研究者も熟読すべき一冊であると考えられる。



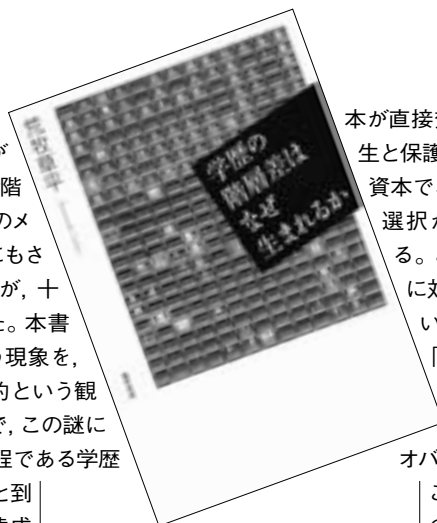
吉田 崇

静岡大学人文社会科学部 准教授

出身階層・出身家庭によって教育達成に差があることは、教育社会学・社会階層研究では常識に属する。このメカニズムについてはこれまでもさまざまな説明がなされてきたが、十分に説得的とはいえなかった。本書は、「学歴達成の階層差という現象を、個人の進路選択に対する制約という観点から解明すること」(p.2)で、この謎に迫る。その際、複雑な決定過程である学歴

達成を理解するために、出身と到達の関連だけでなく、「学歴達成の『過程』における『様々な階層要因』の『作用経路』に着目」(p.6)した分析が展開される。これだけ読むと、これまでの教育達成研究が繰り返して検証してきた課題設定と大差ないかのように思えた(が、そう思うのは早計であった)。本書全体を通してこのアプローチの有効性が発揮されることになる。本書は3部で構成されており、第I部では客観的な階層格差の把握、第II部では主観的な進路選択過程の分析、第III部の展開と結論では拡大家族効果の分析がなされる。

以下、実証分析の章を中心に内容を紹介する。第1章では特に戦後の急激な社会変動・制度変化にもかかわらず、階層差が安定的に存在していたことが確認される。第3章ではロバート・メアの移行モデルに基づいた分析がなされ、初期学力形成に対する階層の影響は小さく、中卒後・高卒後の進路選択において階層の直接的な制約効果があることが明らかにされる。また、既存の単一理論では日本の現状を十分説明できないことが強調される。第5章では、高校生調査を用い、親子間の価値志向の伝達を媒介した再生産の可能性が検討される。価値志向の伝達は否定される一方、階層の制約効果が改めて確認される。第6章では、進路選択に文化資



学歴の階層差はなぜ生まれるか

荒牧草平 著

勁草書房
2016年
A5判, 304ページ
4,644円

本が直接効果を持つ理由について、高校生と保護者の調査を用いて検討し、文化資本でなく親の教育期待によって進路選択が制約されていることが示される。ここまでの分析で、初発の問いに対しては一定の結論に至ったといえそうだが、さらに第7章では「全国家族調査(NFRJ)」を用いて、拡大家族の学歴の効果を検討し、祖父母の「累積効果」、オジオバの「補償効果」が見いだされる。

これは「教育的地位志向モデル」の展開例であると同時に、モデル理解のための補助線の役割を果たしているといえそうだが、これまでの検証過程からは不連続な展開であるため、戸惑う読者もいるかもしれない。

本書の特徴のひとつとして複数調査の活用を挙げることができよう。SSM調査と2種類の高校生調査、そしてNFRJが使用され、これらがバラバラではなく有機的に配置されている。ただし、説明変数が分析ごとに異なる点は、結果を総合的に理解することをやや難しくしているようにも思う。

もちろん、新たな知見が加わることのメリットの方が大きいのはいうまでもない。最後に、本書で用いられている計量分析についても触れておきたい。ほとんどの分析は回帰分析を中心とするものであり、標準的な理解があれば読み進めることができよう。また、結果の提示方法にも随所に工夫が見られ、理解を促している。以上、駆け足になったが、ここでは扱えなかった丹念な先行研究レビューとそれに基づく課題設定についても読み応えがある。「読みやすい本」とは決していえないが、丁寧で緻密な議論展開で、検討課題を次第に深化させながら核心に迫る過程では、計量分析の醍醐味を十分に味わうことができる。実際に手にとって追体験することを勧めたい。

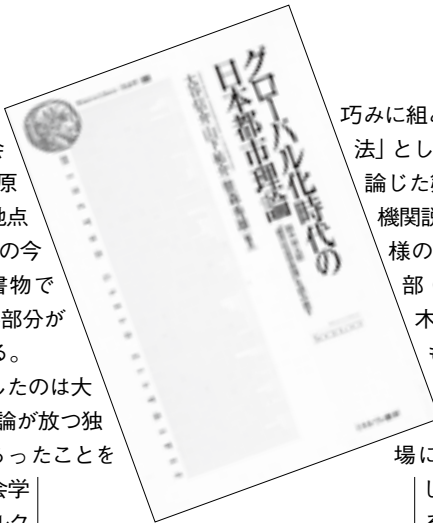
本書は、鈴木栄太郎の著作のひとつ『都市社会学原理』（初版1957年、以下『原理』）を対象に、同書が扱った地点の50年後の再調査を含め、その今日的意義の再検討をめざす書物である。巻末には『原理』の主要部分が110頁にわたり再録されている。

私が『原理』を初めて通読したのは大学院生の頃であった。鈴木理論が放つ独特の質感がとても印象的であったことを思い出す。シカゴ学派都市社会学とも違う。また機能主義やマルクス主義といった社会学理論の当時の本流とも異なる。日本農村社会学から出発した鈴木ならではの土着的思考に基づく大著は、正直、位置づけ方が難しい作品だった。当時の都市研究の多くのように、都市化という変動を遂げつつある社会を、変化前と変化後の対比という形で二分法的に論じるわけではない。そうではなく、都市という社会の本質を真正面から解明するため、関係・集団、社会的統一、前社会的統一、空間といった概念を駆使しながら、説明

のための部品を独自に練り上げていく。そうした部品づくりとその組み立ての過程を導く手段として、個性的な社会調査の結果が活用される。

都市とは、日常生活における生活協力を可能にする聚落社会である。ただし都市は、最終的には国家に至る広域的な社会構造における結節の機能を担っており、この点で村落から区別される。鈴木理論は、共同体や生活構造といった都市コミュニティの視点とグローバル化論にも連なるスケールの大きな都市構造的視点とを統合する試みの先駆けとして、いまも古びない価値をもつ。

本書はそうした鈴木社会学の意義と面白さを多面的に伝える。鈴木栄太郎の下で実際に調査を支えた笹森秀雄による回想（第I部）、理論と実証を



グローバル化時代の 日本都市理論

鈴木栄太郎『都市社会学原理』を
読み直す

大谷信介
山下祐介 編著
笹森秀雄

ミネルヴァ書房
2015年
A5判、400ページ
3,240円

巧みに組み合わせた「実証的社会学研究法」としての先駆性とその現代的意味を論じた第II部（大谷信介）、そして結節機能説のアクチュアリティを鈴木と同様の調査で50年後に検証した第III部（山下祐介）からなる本書は、鈴木理論への格好の入門書としても読める。

本書で笹森は、病床にあった鈴木栄太郎が自身で調査の現場に出向いたことは北大時代を通

じて2回しかなかったと回想する（38頁）。実際、『原理』を読むと、笹森や布施鉄治など当時の学生・院生が実査を担当したことが紹介されている。それでも実証が可能になったのは、大谷も指摘するように、調査企画段階ですぐれた工夫が用意されていたことによる。その意味で、『原理』は分厚い実証に基づいてはいるが、しかしフィールドから生まれた書物ではなかった。

だが、いま振り返ると、現場とこの距離が大切だったのだと思う。そもそも札幌は、岐阜・ソウルと移住してきた鈴木にとっ

て新たな異郷といえる場所であった。鈴木の場合、そうした距離の取り方は体調ゆえのやむを得ないものでもあった。しかしそれゆえ、鈴木は、地点も方法も異なる多様な社会調査の結果を、自らの理論構築過程に自在に組み込むことができた。『都市社会学原理』の孤高ともいえる成果は、理論と実証のこの緊張感にみちた結合がもたらしたものであった。それと比べると、今日の研究は社会調査（ができること）に甘えてはいないか。またフィールドを免罪符にして、自らの思考を研ぎ澄ますことを疎かにしてはいないか。本書を通じて鈴木の問いを振り返りながらそんな思いをもった。社会学理論と社会調査の将来に関心をもつ読者にぜひ一読を勧めたい。



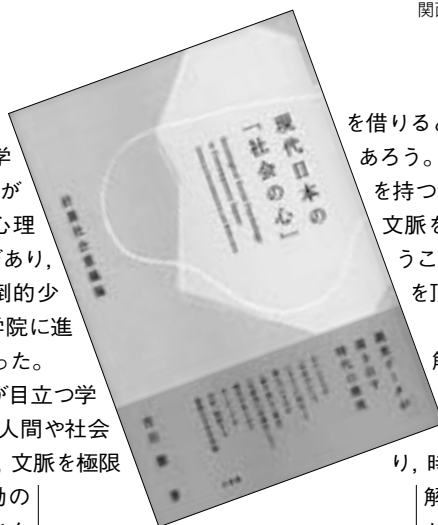
稲増一憲

関西学院大学社会学部 准教授

学問分野の見取り図を持つため学部生は、自らが学んだものこそが〇〇学と思いがちである。社会心理学には心理学的と社会的という区分があり、自分が学んできた後者は圧倒的少数派と私が知ったのは、大学院に進学し、学会に参加した後であった。

心理学的社会心理学のみが目立つ学界に対しては、私が知りたい人間や社会とはこんなものなのだろうか、文脈を極限までこそげ落とした人間行動の一般命題など、落語「目黒のさんま」で殿様の前に出された脂をすっかり抜かれたさんまのようではないか。そう思わないわけでもない。しかし一方で、現状は無理からぬこととも思う。人間行動の一般命題を求め、時には数万年前の社会にまで遡り、遺伝子や脳神経にまで踏み込む現代の心理学的社会心理学に比べて、社会的社会心理学は研究のスケールが小さいと思う瞬間も少なくない。

そんな葛藤を抱える私にとって、本書や『社会意識から見た日本—階層意識の新次元』（数土直紀編、2015年）を通じて計量社会意識論という分野と出会えたことは、思わぬところで強力な援軍に遭遇したような出来事であった。1985年から2010年までの25年間は、人類の進化という観点からいえば取るに足らない期間ではあるが、2つの時代の違いは現代を生きる我々にとって極めて重要である。自らが生きる時代を知ることは、政策等への応用可能性も高く、生物としてのヒトを知ること同様、知的刺激に溢れている。そして、同時代に生きる人間にしか解釈できない現象があるにも関わらず、同時代に生きる人間自身が社会の特徴を偏りなく観察するのは困難である。このジレンマを解決する上で、代表性が確保された社会調査データと計量分析の力



現代日本の「社会の心」

計量社会意識論

吉川 徹 著

有斐閣
2014年
四六判, 268ページ
2,484円

を借りるという方策を採ることは必然であろう。この2冊を通じて、多様な属性を持つサンプルを確保し、時代が持つ文脈を考慮した社会心理学研究を行うことに対して、勝手ながらエールを頂いたように思えた。

一方で本書において著者と見解を異にするのは、「社会意識論型回帰モデル」の重要性についてである。モデルの固定により、時代の変化を取り出す目的は理

解できる。しかし、時代の変化が「社会意識論型回帰モデル」における独立変数と従属変数の関連および決定係数の違いに表れたのは、1985年と2010年の比較における偶然ではないだろうか。今後も同様の形で時代の変化が表れる保証はない。であるならば、なるべく多様な分析手法を取り入れるべきではないか。

一例を挙げれば、サンプリング手法に問題はなくとも、地方ごとの違いが顕著になり、独立変数と従属変数の関連が地方ごとに異なる変化が生じた場合、これを析出する上でマルチレベル分析は有

効である。地方ごとに回帰係数が異なるならば、地方の数だけ回帰分析を行うという考え方も有り得る。しかし、マルチレベル分析は、サンプルが一樣ではなくクラスター化されているという発想に我々を容易に導く。新たな分析手法は時代を記述する方法を増やし、比較のバリエーションを増やす可能性がある。

やみくもに新しい分析手法に飛びつくのは虚しい。しかし、「時代の特徴を明らかにするかどうか」という判断基準さえあれば、新たな分析手法の導入を避ける必要はないのではないかと。むしろ、この基準をもって次々登場する分析手法に向き合えることもまた、計量社会意識論という学問分野が持つ強みであるように思える。